沈んだ覇王

落合 ななせ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
沈んだ覇王

【Ｎコード】
Ｎ２５３０Ｖ

【作者名】
落合　ななせ

【あらすじ】
遥か昔、神々の手によって封印されたという覇王と女神の力。彼らが放った思念の声を聞いたのだと主張する謎の少年・リオンが、ある日突然エイトの元を訪れる。このままでは人間界が滅んでしまうと知ったエイトたちは、それを阻止すべく旅に出るのだった。
「ドラゴンクエスト？　―空と海と大地と呪われし姫君―」のオリジナル二次創作となっています。おなじみのメンバーと共に、新たな冒険の旅に出かけましょう。

00

あたりは死んだように静まり返っていた。
両脇に立つ女神像の微笑みをうっとうしそうに見やってから、少女はもう一度、眼前の青年に訴える。
「神に従う必要なんてないわ。逃げましょう、一緒に」
その声は薄闇によく響いた。まっすぐで、強い意志を持った声だと青年は思った。
少し口元を緩めて、まだ幼い彼女の姿を目に焼きつける。肯定して、ほんとうにそのまま逃げられたなら、どんなにいいだろう。無謀と知りながらも、彼はいまだに神々への反抗を諦めきれずにいた。彼らの横暴なやり方は、決して許されるべきではないのだ。
――それでも、頷くことはできない。
「いけないよ。神に抗ったらどうなるか、ディアにもわかっているはずだろう」
「やってみなくちゃわからないじゃない」
少女の手が、彼のコートをぐいと掴んだ。ワインレッドをした切れ長の瞳に、うっすらと涙が広がっていく。
「神界へ行ったら、兄さまは心を失ってしまうのよ。これまでのことも、父さまと母さまのことも……私のことだって、みんな忘れてしまうのよ。それでいいの？　それで、兄さまはしあわせなの？」
彼は思わず唇を噛み締めた。逃げるようにまつ毛を伏せる。言いつくろったところでどうにもならないのだと、彼は理解せざるをえなかった。
「……だれも、しあわせにはならないよ」
少女が息を呑む。真意を押し殺さんとばかりに、大きな夜風が吹いた。
「でも、今はこうするしかないんだ。ぼくにできるのは、今を護ることだけなんだから」

気づかぬ内に、拳が力んでいた。彼女はそれを見逃さなかったらしい。開きかけていた口を閉ざし、眉尻を下げて、少しずつうつむいていく。細い腕が、彼の身体をぎこちなくなぞって、すとんと落ちた。

「ありがとう」と彼は言った。「元気で」

彼女の肩が震えた。答えはなかった。それだけで、充分だった。

背を向けて、歩き出す。歩幅は自然と狭くなった。せかすように風が走り、彼を追い抜く。濃い鉄のにおいがした。なんて皮肉なのだろうと、無性に吐き捨てたくなった。

神々の命に応じなければ、ここ一帯は血の海になる。妹も無事では済まない。選ぶ道など、はじめからひとつしかありはしないのだ。

「――こんな世界が、あってたまるか」

その呟きを最後に、彼の身体は冷たい青の光に包まれ、音もなく消えた。

01

人として、その胸に誇るものがあるのなら。
戦いなさい。自由のために。

◇

背の高い叢（くさむら）は、エイトの痩身をすっぽりと覆い隠してくれていた。息を殺して、草と草の隙間から敵を見る。数はたったの一。白銀の毛並みと赤黒い目を持つ狼のようなそれは、世界中を旅して回った彼にさえ覚えのない、美しい魔物だった。

気品さえ漂わせるその獣に、エイトは一瞬、かつてのミーティアを思い起こした。ミーティアはエイトが仕えるトロデーン王国の姫君であり、彼の幼馴染みでもある。彼女は数年前、城を訪れていた道化師のドルマゲスに呪いをかけられ、姿を馬に変えられていたのだ。暗黒神の破滅と共にその呪いは解け、今や彼女は元の麗しさを取り戻している。しかし、馬に姿を変えてなお滲み出ていた高貴な品格に、エイトは今でもそっと感心し続けているのだった。あれは人間の――彼女の器の表れである。だから、あのような雰囲気を纏う異類は他にないと断言できるはずだった。

ところが鼻先の魔物はどうであろう。ミーティアに抱いた感覚と非常に近いものが、エイトの胸を揺さぶり始める。一体どういうことなのだ。まるで人間ではないか。

悩む彼を尻目に、魔物が移動を開始した。ゆったりとした足取りで、薄暗い木々の間を器用に通り抜けていく。

魔物はすっかり背を向けていたが、エイトは斬りかかることを潔しとしなかった。腰元の剣にそえていた手を下ろし、躊躇う。やが

て呼吸をひとつして、静かに立ち上がった。
途端に魔物が首をめぐらせた。素早い動作だったが、慌ててはいないのだとエイトにはわかった。彼にそう思わせるだけの落ち着き様が魔物にはあった。
「あなたは、最初から僕の気配に気づいていましたね」
思わず声をかけていた。緊迫した沈黙が流れる。魔物は瞬きの後、わずかに目を細めたようだった。構わずエイトは続ける。
「僕はあなたを殺しに来たのではありません。だから、できれば少しだけ安心してほしいのですが」
その言葉に、魔物ははっきりと顎を上げた。
『無理な相談だ』
よく響く、澄んだ女の声だった。強くもどこか哀しげなそれに、エイトは確信を得る。
「駄目、ですか」
『少なくとも、先ほどまでは私を殺そうとしていただろう。貴公の真意はともかくな』
「あれは……」
言いかけて、首を横に振る。どんな言い訳をしようと、この魔物には通用しないだろう。本題に移ることにする。
「僕はトロデーン王国の者です。城の門番を襲うあなたを目撃し、ここまで追いかけてきました。どうしてあんなことをしたのか、理由をお聞かせ願います」
魔物の瞳が冷ややかな陰を宿す。
『獣が人を襲うのに、理由が必要だと言うのか』
「あなたは」エイトは鋭い視線をしかと受け止め、彼にしては強い語調で訊ねた。「あなたは、人間なのではありませんか」
しんと空気が凪がれる。魔物はしばらく無言のままエイトを見つめていたが、やがて目元を和らげ、優しく問いに応じた。
『間違ってはいない。それでも、私は人間ではないよ』
声はひどく寂しげで、まるで自分に言い聞かせているようだった。

触れてはならない部分に触れてしまったのではないかと、彼は目を伏せる。
『貴公のところの兵を傷つけたことなら謝ろう。わけを知りたいなら話してやってもよい。ただ――』
エイトが顔を上げる。魔物の双眸は、いつの間にか狂気的な光を帯びていた。背筋を冷気が伝う。
『その前に、貴公は死ぬかもしれんな』
聞き終えるのが先か否か、エイトの頭上で赤い刃が煌めいた。

02

咄嗟に剣を抜き、両手で掲げる。そこに迷いのない一撃が叩き込まれた。驚くほどの衝撃と重みに身体を震わせながら、エイトは歯を食いしばる。

「あら、結構しぶといわね」

降り注がれる声は女の――正確には魔物と同じものだった。新たな疑問がエイトの脳内に浮かんだが、考えている余裕はない。重心を外へずらし、両方の手で力いっぱい剣を払う。奇襲者は抵抗する素振りも見せず、エイトの力に乗って弾かれた。そうして魔物の傍らへ静かに着地する。

相手は、まだほんの少女だった。真っ白な長髪を黒いリボンで二つにまとめており、深い赤色をした切れ長の瞳が、品定めするようにエイトを窺っている。目の覚めるような美人だ。

『上空からの不意打ちは、少し卑怯じゃないか』

からかうように魔物が言う。

「いいじゃないの。せっかくの力なんだから、楽しまないとね」

少女は唇の端を歪め、艶かしい笑みを刻んだ。血色の刀を小さく一振りする。

「私の初撃を受けきった人なんてはじめて。さすがは暗黒神の手から世界を救った勇者さまってところかしら。これなら安心だわ」

エイトは少女と魔物から目を離さずに身構える。数々の実践によって磨き抜かれたはずの腕は、仄(ほの)かな痺れを帯びていた。息が詰まりそうになる。拠り所のない恐怖が膨らむ。誰にともなく誤魔化したくて、剣を握る手に力をこめた。

「へえ……。あなたのそういう姿勢、反吐が出るわね。すっかり神好みの飼い犬に成り果てちゃって。情けない」

怒りの中に自嘲的な色を滲ませ、少女が眉を上げる。持ち手の感情に応えるように、刀がぬらりと光った。来る。

『……ロゼリー』
ふと魔物が呟いた。物静かな強さを秘めた一言に、少女は頬を強張らせ、やや動揺したようだった。漂い出ていた闘気がかすれて、空気中に溶けていく。
「……わかってる」
いかにもおもしろくないといった顔つきで、ついに少女は刀を放り捨てた。地に落ちたそれは、どういうことか、乾いた音を立てた後に忽然と姿を消した。何かの魔法によるものだろうか。
構えを崩さないエイトに、少女がため息混じりで言う。
「落ち着きなさい、もう斬りかかったりしないわ。あなたには役目があるから、まだ生かしておいてあげる。竜神の血に感謝することね」
少女の言葉から発せられる意味深な香りは感じ取れるものの、エイトにはその意味が一つもわからなかった。そもそも、目の前の少女は何者なのか。何故突然襲われなければならなかったのか。記憶を探ってみても、見当はつきそうもない。
何から訊ねたものかと迷っている内に、少女と魔物の姿が蜃気楼のように揺らぎ始めた。淡い光が湧き起こり、その白い粒が彼女たちを包み込む。
「あなたはこれから、かつての仲間と共に戦うことになるでしょう。護りたいものがあるのなら強くなりなさい。今の私に言えるのはそれだけよ」
強い瞳だった。ただ一点だけを見据える、意志の固い瞳だった。
――また、逢いましょう。
それが最後だった。
エイトは口を開くこともできずに、少女たちが光の粒になって消えていくのをじっと見つめていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2530v/

沈んだ覇王

2011年8月23日03時39分発行